

〔直訳〕

46 そして 彼らは来る エリコの中へ。

そして 出て行くとき 彼が エリコから

そして 彼の弟子たちと多くの群衆が

ティマイの子 バルティマイが、 目の見えない乞食が、

座っていた その道のわきに。

47 そして 聞いて 次のことを ナザレのイエスが いる、

彼は始めた 叫ぶことを そして 言うことを

「ダビデの子よ イエスよ、 憐れんでください 私を」。

48 そして 叱っていた 彼を 多くの人は

ようにと 彼が黙る。

だが彼は さらに もっと 叫び続けた

「ダビデの子よ、 憐れんでください 私を」。

49 そして 立ち止まって イエスは 言った

「あなたがたは呼びなさい、 彼を」。

そして 彼らは呼ぶ、 目の見えない人を

言いながら 彼に

「あなたは元気を出しなさい

立ち上がりなさい

彼が呼んでいる、 あなたを」。

50 だが彼は 投げ捨て 彼の服を

飛び上がって

来た イエスのもとへ。

51 そして 答えて 彼に イエスは 言った、

「何を あなたに あなたは欲するか 私が行う」

だが 目の見えない人は 言った 彼に、

「ラッブーニー、

ようにと 私が再び見えるようになる」。

52 そして イエスは 言った 彼に

「あなたは行きなさい、

あなたの信仰が 救った あなたを」。

そして すぐに 彼は再び見えるようになった

そして 従った 彼に その道において。

〔新共同訳〕

46 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行くこととされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。47 ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。48 多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。49 イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」50 盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。51 イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになります」と言った。52 そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

①構成

④ 46節と52節後半に「その道」とある。「その道」とは文脈から考え、エルサレムへの道である。この物語は、「その道」のわきに座り込み、物乞いしていた者が、「イエスのもとへ」と呼び出され、「その道」をイエスに従うことになったことを述べている。

⑤ 47—52節前半は三つの部分に分けることができる。47—48節では、「叫ぶ」が二度使われている。48節の「叫び続ける」は、「叫ぶ」の未完了形であり、動作の継続を表すので、「叫び続ける」と訳している。48節の「叱っていた」も未完了形であり、これも動作の継続を表すなら（動作の開始の意味にも取ることができる）、叱り続ける人々と叫び続けるバルティマイの対比を見ることができる。

⑥ 49節では、「呼ぶ」が三度使われている。この繰り返しは、「叫ぶ」者に対する応答の確かさを表しているだろう。

⑦ 50—52節前半では、呼ばれて「イエスのもとへ来た」バルティマイとイエスとの対話が語られている。51節のイエスの言葉を直訳すれば、「何をあなたに私がしたらよいと欲しているか」となる。このような言い回しは、ヤコブとヨハネの願いに対してイエスが問いかける箇所（一〇36）にもある。イエスは「あなたの信仰があなたを救った」と述べ、バルティマイの願いを実現している。ここでの「信仰」は「叫ぶ」ことの中に表されている信仰である。

②「その道」のわきで（46節）

⑧ ③三回にわたる受難予告を終え、エルサレムに向かうイエスは、エリコの町を通り過ぎようとする。直訳の一行目に「エリコの中へ」とあり、二行目に「エリコから」とあることから考えると、エリコの町に入った一行は立ち止まらずに、そのままエリコから出て行ったのだろう。イエスは偉大なラビのように群衆に取り囲まれて町を過ぎてゆく。イエスの姿をこのように描写することによって、むしろ、イエスを歓迎する町の人々を描こうとしたのかもしれない。この興奮が盲人を「叱って黙らせよう」とさせたとも言えるだろう。

③叫ぶバルティマイ（47節—49節）

⑨ a 「叫び続けた」

バルティマイはイエスがいると聞くと、イエスを「ダビデの子」と呼んで、叫び続ける。ここで「ダビデの子」はメシアを表す称号である。だが、群衆は黙らせようとして、彼を叱りつける。彼らが期待するメシアは政治的な勝利者であり、高い人であるから、道端に座る乞食に関わる時間などはない。彼らはそのようなメシアを高く崇めることによって、自分たちも高くなり、道端に座る者の苦悩が見えなくなる。

⑥ 「呼んでいる」

この場の人々の目は閉ざされている。それはメシアを見間違えることから生じる。イエスは道端に座り込む者の苦しみから目をそらすメシアではない。バルティマイの叫びに耳を留めて立ち止まり、「彼を呼びなさい」と命じる。49節には「呼ぶ」が三度使われているが、この動詞はルカ8章54節やヨハネ12章17節では、死んだ者を命へと「呼ぶ」イエスに使われている。ここでは、「道」のわきに座り込んでいた者を、イエスは「道」へと呼び出している。この「道」は十字架への道であるが、この道こそが命への道だからである。

⑦ 叫ぶ (クラーゾー)

⑦ 大声を出す、あるいは意味不明の言葉で「叫ぶ・わめく」。病人に取り憑いた悪霊(マコ5:9、26、ルカ9:39)、湖上を歩くイエスを見て恐れる弟子(マタ14:26)、十字架上のイエス(マタ27:50)、ステファノの説教に怒る人々(使7:57)、咆哮する獅子(黙10:3a)、天使(10:3b)、陣痛に苦しむ女(一二:2)などの叫びを表す。

④ 「叫ぶ・大声をあげる」。共観福音書では、イエスにいやしを求めて「叫ぶ」という用例が多い。盲人や(マコ10:47・48と並行箇所、マタ9:27)、悪霊に憑かれた子供を持つ親が「憐れんでください」とイエスに叫ぶ(マタ15:22・23)。また、湖に沈みかけたペトロはイエスに「主よ、助けてください」と叫び(マタ14:30)、悪霊はイエスに出会うと「あなたは神の子だ」(マコ11:11、ルカ4:41)、「かまわないでくれ」と叫ぶ(マコ5:7、マタ8:29)。エルサレムに入るイエスを喜ぶ人々は「ダビデの子にホサナ」と叫んで歓迎し(マコ11:9、マタ21:9・15)、もしこれらの人々が黙れば石までが叫ぶだろう(ルカ19:40)。さらに、バラバの釈放を要求する群衆が、ピラトにイエスを「十字架につけろ」と叫ぶ(マコ15:13・14、マタ27:23)。

④ イエスとの対話 (50—52節前半)

① a 「投げ捨て」

呼ばれたバルティマイは「服を投げ捨て、飛び上がって、イエスのもとへ」行く。この服は、喜捨を受けるために彼の前に広げられていたのかもしれない。そうであれば、この服は古い生き方の象徴であり、それを「投げ捨てた」のは新しい生き方への転換を表すのであろう。しかし、この動詞は単純に「服を脱ぐ」の意味でも使う。いずれにせよ、服を捨てさせるほどの喜びを言い表しているのは確かである。

② b 「何をあなたに私したらよいと欲しているか」

同じ問いかけが、栄光を求めたヤコブとヨハネに向けられている。栄光を求めた彼らの願いは、「神が決めることだ」と受けられたが、憐れみを願って叫んだバルティマイの願いは「あなたの信仰があなたを救った」と受け入れられる。神は一方的に思いを人間に押しつけずに「何をしたいのか」と尋ねるが、そうかといって、神を人間の思うがままにコントロールすることもできない。神の思いと人間の思いとの間には、常に緊張がある。

③「あなたは行きなさい」

「行く(ヒュパゴー)」の命令形は「行け」という意味を失い、何か行動を促す呼びかけとして使われることがある。また、「行け」の意味をとどめるだけでなく、「家に帰れ」の意味だとすることも可能である。もちろん、エルサレムへの道を「行け」の意味に取ることもできる。

④「あなたの信仰があなたを救った」

イエスはバルティマイをいやすが、いやしの言葉や仕草は何も書かれてはいない。マルコでは、「あなたの信仰が救った」と語るだけである。これは信仰の重要性を強調するとともに、この物語が奇跡物語というよりは、召し出しの物語であることのしるしである。また、マタイやルカの並行記事と比較すると、マルコではバルティマイのいやしは後退して、「道」への興味が前面に出ているのが分かる。この点も、マルコにとってこの出来事が召し出しの物語であることを示している。

⑤イエスに従う道(52節後半)

①「イエスにその道において彼は従った」

「その道において」をイエスに結びつけて訳せば、新共同訳のように「なお道を進まれるイエス」という訳し方になる。しかし、この物語では最初に「その道のわきに」とあり、最後には「その道において」という句が置かれて対応している。この対応に意味があるなら、「その道のわきに」と「その道において」がバルティマイの位置を示していることと見ることが出来る。イエスが歩む道のわきに座っていたバルティマイは、イエスに呼ばれることによって、十字架の待つエルサレムへと続くその道に入り、イエスに従った。

②「道(ホドス)」は、具象的には「道路・街路」を指すが、そこから「旅路・旅」の意味でも使われ、さらに比喩的に使われれば、パウロが「キリスト・イエスに結ばれたわたしの道」と述べるときのように、人の「生き方」(マタ二一32)やキリスト教の「教え」(使二四14)の意味にもなる。

③マルコでは、受難予告の後、道を歩むイエスの姿に注意が向けられている(九33・34、一〇17・32)。イエスの歩む道は、エルサレムへの「旅路」であり(一〇32)、十字架に向かう彼の「生き方」であるが、師に従うべき弟子から見れば「教え」でもある。46節で「その道のわきに」座っていたバルティマイが、イエスに呼び出されて神の憐れみに触れた後、イエスの「その道において」に従うことでこの物語は閉じられている(52節)。ここでの「道」はただイエスの歩む道を指すだけでなく、人の「生き方」やキリスト教の「教え」をも表しているだろう。イエスの道は受難への道であるが、同時にそれは復活への道でもある。この道は「わたしは真理であり、道であり、命である」(ヨハ一四6)と言われる道である。

⑥神に叫ぶ

目の不自由な物乞い、バルティマイが「ダビデの子、イエスよ」と叫びをあげる。バルティマイは「叫び」、イエスは「呼ぶ」。人が憐れみを求めて叫ぶとき、神は呼ぶ。詩編一〇七に「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから救ってくださった」(6節)とあるが、このような「叫び」は神への信頼を表す叫びである。「叫び」が信頼となるとき、神は呼びかけ、「道」を示す。